

オンラインでの学術大会における視覚情報保障のあり方の検討 —テキストデータ・等価情報を作成する際の工夫・課題の分析—

○相羽 大輔
(愛知教育大学)

成松 一郎
(専修大学)

奈良 里紗
(長野大学)

KEY WORDS: 学術大会 視覚障害 アクセシビリティ

I. 問題と目的

日本特殊教育学会は、学術大会のアクセシビリティ向上に努めており、障害のある参加者のうち、視覚障害のある参加者(以後、視覚障害者)には、例年、大会準備委員会が(1)発表補助、(2)移動支援、(3)会場内表示、(4)危険個所の確認と対応を、学会アクセシビリティ委員会(ACC 委員会)が論文集のテキストデータ(点訳を含む)を提供してきた。これらは視覚障害者が他の参加者と同様に学術大会に参加する上で一定の効果をあげてきたものの、それだけでは不十分であり、例えば、論文集に含まれる図表・写真、シンポジウムのスライド・映像等の視覚情報へのアクセスは課題(澤ら, 2018)とされた。

一方、新型コロナウイルス感染症が蔓延する昨今においては、多くの学会が学術大会をオンラインで開催するようになり、2020 年に開催された本学会の第 58 回大会(前回大会)も同様であった。オンラインの学術大会では、論文集と発表動画に含まれる視覚情報へのアクセスがより深刻な課題となるため、ACC 委員会と支援団体の協力により、視覚情報に等価情報を付与するサービスも提供された。

そこで、本報告では、学術大会における視覚情報保障のあり方を検討するため、前回大会を振り返り、テキストデータや等価情報を作成する際の手順、工夫、課題を整理する。

II. 方法

1. 調査協力者

本研究の協力者は、前回大会の視覚情報保障に協力した支援団体の担当者 1 名であった。協力者は、図書館や企業にて学術資料のデジタル版やテキストデータ版の制作・編集など、視覚情報保障の業務に 8 年間携わった者であった。

2. 調査手続き

調査にあたっては、支援団体と調整し、調査目的・内容・倫理を説明した上で、202X 年 5 月に、1 回(60 分程度)の半構造化面接をオンラインで実施した。なお、本研究は所属機関の研究倫理規定を遵守して行った。

3. 調査内容

論文集と発表動画について、作成手順(等価情報を含むテキストデータを作成する流れについて)、工夫(どのような工夫をしているか)、課題(困っていることは何か)を尋ねた。

4. 分析方法: 面接内容は協力者の同意を得て録音し逐語データ化し、その内容を質的に整理した。この作業は視覚障害教育分野の大学職員 2 名と支援者 1 名の合議で行った。

III. 結果と考察

前回大会では、論文集は(A)講演、(B)学会企画シンポジウム、(C)準備委員会企画シンポジウム、視覚障害領域の(D)ポスター発表、(E)口頭発表、(F)自主シンポジウムの抄録が情報保障の対象となり、発表動画の方は、(D)以外の全てのスライドデータが対象となっていた。それぞれの発表について、協力者がアクセシブルデータ(PDF とテキストデータ)を作成し、USB メモリに保存して視覚障害者に提供していた。以下、協力者から聴取した内容を項目別に記した。

1. テキストデータ・等価情報の作成手順

アクセシブルデータを作成するため、オリジナルデータを学会から取り寄せ、その中に埋め込まれている本文(テキストデータ)と、図表・写真のキャプション(テキストデータ)を抽出し、テキストデータが抽出できない図表・写真については、協力者が数値等を読み取り、説明を補足した等価情報を追加することで、ひとつの発表のテキストデータを完成させた。

2. テキストデータ・等価情報を作成する際の工夫

「オリジナルデータから抽出されたテキストデータが本文の順番通りになっているか確認している」、「図表から正確に数値が読み取れているか確認している」、「図表から読み取った等価情報を本文内の正確な位置に挿入している」といった回答からもわかるように、正確性に関する工夫が示された。

また、「複雑な図表ではテキストデータ化した際に内容がわかりにくいので概要がわかるよう補足説明を加えている」や「解像度の低い写真は、サイズが小さく、鮮明でないため、協力者が説明をつけることは難しく、間違った説明をする危険性もあるため、キャプションによる説明を基本とする」といった回答からもわかるように、協力者が解釈し、補足した部分はそれがわかるよう明確に記すという工夫もみられた。

3. 課題

「単純なグラフであれば、数値をテキストデータにすることが容易であるが、複雑で数値が示されていないグラフは判別が難しい」や「PPT の資料は、メモ的な内容も多く含まれるため、単純にテキストデータを抽出するだけでは、わかりやすい資料になっていない可能性がある」という回答からもわかるように、視覚情報保障が必要な部分として、協力者が解釈・補足した説明の妥当性を危惧する課題が上げられた。

また、「専門性が高い論文が多く、図表から数値等を読み取るのに時間がかかる」や「理数系の内容が含まれる論文では、専門的な数式が含まれる場合があり、そのままテキストデータ化がむずかしい」という回答からもわかるように、専門的な内容を取扱う難しさもあげられた。

IV. まとめ

協力者はオリジナルデータを正確に再現するための工夫に努めながらテキストデータや等価情報を作成し、必要に応じて、自身の解釈・補足を取り入れ、その部分については、協力者が記したことが明確にわかるような工夫も行っていた。一方で、必要に迫られながらも協力者が解釈・補足した部分の妥当性や専門的な内容を取扱う難しさは、いずれも発表者の意図に合致するかどうかという問題と関連し、協力者による視覚情報保障の限界を示唆するものであった。特に、等価情報への対応は、今後、発表者の協力が不可欠と考えられる。

文献

澤隆史・大庭綾・相羽大輔・白澤麻弓・任龍在・中野聡子 (2018) 学術研究大会におけるアクセシビリティの現状と展望. 日本特殊教育学会第 56 回大会発表論文集, 29.